

高松城天守

天守復元の取組



高松城天守復元CG(南東から)

高松城天守の沿革

天守の建造

高松城は、天正 16 (1588) 年に、豊臣家の家臣であった生駒親正によって築城が開始された城郭です。

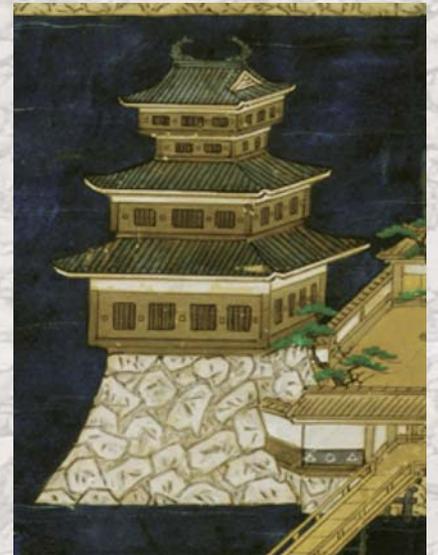
生駒家が築造した天守の姿については諸説あり、どのような形状のものであったのかはよく分かりませんが、『讃岐探索書』『寛永十年讃岐国絵図』等の絵図や『小神野夜話』等の文献から、三重の天守であったことがうかがえます。



『寛永十年讃岐国絵図』に描かれた天守
(丸亀市教育委員会蔵)

天守の改築

生駒家がお家騒動で出羽国矢島に転封されたのち、松平家が入部します。初代松平頼重、二代頼常は、城の増改築に着手します。生駒家が築造した天守もこの時に改築されました。発掘調査の結果、生駒家が築いた天守台石垣を再利用し、上部の建造物を建て替えたものと考えられます。松平家が築いた天守は、3重4階+地下1階の5層構造でした。最上階が一つ下の階よりも張り出して造られる「南蛮造り」と呼ばれる構造が特徴です。その後、大規模な改修の記録は無く、明治維新後もこの天守は本丸にその姿を留めていました。



『高松城下図屏風』に描かれた天守
(香川県立ミュージアム蔵)

天守の解体

天守は明治に入ってから松平家が管理していましたが、明治3 (1870) 年には全国的な廃城の流れに従い、廃城届が出されています。その後、陸軍省に管理が移り、明治 17 年に老朽化を理由に解体されます。高松城に置かれた兵營が丸亀に移り、高松城が使用されなく



天守台の上に築かれた玉藻廟(平成17年撮影)

なる中で、四国一を誇る大規模な天守の維持管理は困難であったようです。古写真に写る天守は漆喰が剥がれ、瓦も一部落ちるなど悲壮な姿を見せています。

その後、明治 35 年には天守台に松平頼重を祀る玉藻廟が建築されますが、平成 18 (2006) 年に天守台石垣の修理工事に伴い解体されました。現在天守台は修理を終え、江戸時代の姿を見ることができます。

天守の復元

復元に対する考え方

天守は、高松城の中で最も往時の姿が判明している建物の一つです。文字どおり城郭の中心となる建物であり、聳え立つ天守を復元し、その存在を体感することは、なぜ・どのように高松城が築かれたのか、どのような機能を有していたのか、人々がどのような視線を天守に向け、どのような感情を抱いていたのかといった、高松城の持つ歴史的な意義や価値を知る上でも非常に意味のあることです。また、地域に対する愛着やアイデンティティの醸成、観光や経済の活性化といった効果についても期待されますが、これらは史跡の保存と活用を円滑かつ確実に図るためにも重要です。

一方で、一度失われたものを復元することは容易ではありません。文化財では、遺跡そのものが持つ真実性（Authenticity）を、遺跡の持つ価値の根本として最重要視します。どのように精巧かつ詳細な復元であっても、本来存在したオリジナルそのものには絶対になりえないため、文化財の復元には常に十分な調査研究と慎重な議論が必要となります。

復元の効果と、遺跡の真実性の確保を両立させながら復元は進めなければなりません。そのためには、何よりもまず復元の根拠となる、遺跡の真実性を明らかにするための調査研究から始めなければなりません。高松市では、天守について様々な調査研究に取り組んできました。特に鮮明な古写真の残る松平期の天守については、資料が生駒期の天守に比べると比較的残っており、重点的に調査を進めてきました。これまでの調査で明らかになった高松城天守の姿と、未解決の課題について紹介します。

復元根拠の調査

一般に、歴史的建造物の復元に必要な調査項目は以下の8点に集約できます。

- A 発掘調査：建造物の規模や位置などを確認する
- B 古写真：建造物のある時期の姿を具体的に知る
- C 文献：建造物の使い方、名称、建築年代などを知る
- D 図面：設計図
- E 類例建物：現存建造物で、年代や地域的に近いものを参考とする
- F 絵図：配置や環境を知る
- G 模型：構造及び形式を確認する
- H 絵画：一般的に絵画史料と呼ばれるもので、主に外観を知る

高松市では悉皆的な資料収集と天守台の発掘調査を行い、高松城天守についてD・G以外の資料を確認しました。戦災で焼失するなど、高松城に関する資料は決して豊富ではありませんが、A・B・C・Eが主な根拠資料となります。これらの根拠資料を総合的に検討することで、天守の本来の姿に迫る調査研究を行ってきました。

天守の外観

松平期の天守の外観については、明治時代の古写真や江戸時代の『高松城下図屏風』等によって、3重4階（+地下1階）の層塔型で、最上階が1段下の階よりも広く張り出した、いわゆる「南蛮造り」という特徴的な形態をとることが分かっています。『小神野筆帖』という江戸時代の文献には、小倉城天守をモチーフに建てたことが記されています。また、天守の高さについて、「高拾七間半内石垣四間」とあり、建物部分の高さが26.6m（鯨を入れると28.6m）であったことがわかります。四国最大規模の天守です。

建造物を復元するには、外観の細部まで明らかにする必要があります。ここで最大の効果を発揮するのは、やはり写真です。絵図等では往々にして省略表現が見られますが、写真は形状や配置などの正確な記録に適しています。高松城天守の写真は不鮮明なものがほとんどでしたが、平成17年にケンブリッジ大学図書館所蔵資料の中に、高松城天守を写した鮮明な写真が含まれることが明らかになりました。イギリス人の探検家ヘンリー＝ギルマールという人物が明治15(1882)年に高松を訪れた際に撮影したもので、桜の馬場（天守の南東側）から撮影したものです。一方、北面と西面については写真が1枚も残っていませんが、この2面については絵図資料から南面と東面の状況と同様であると推測されます。こうした資料を基に、高松城天守の立面復元図は、かなり正確に作成することができました。

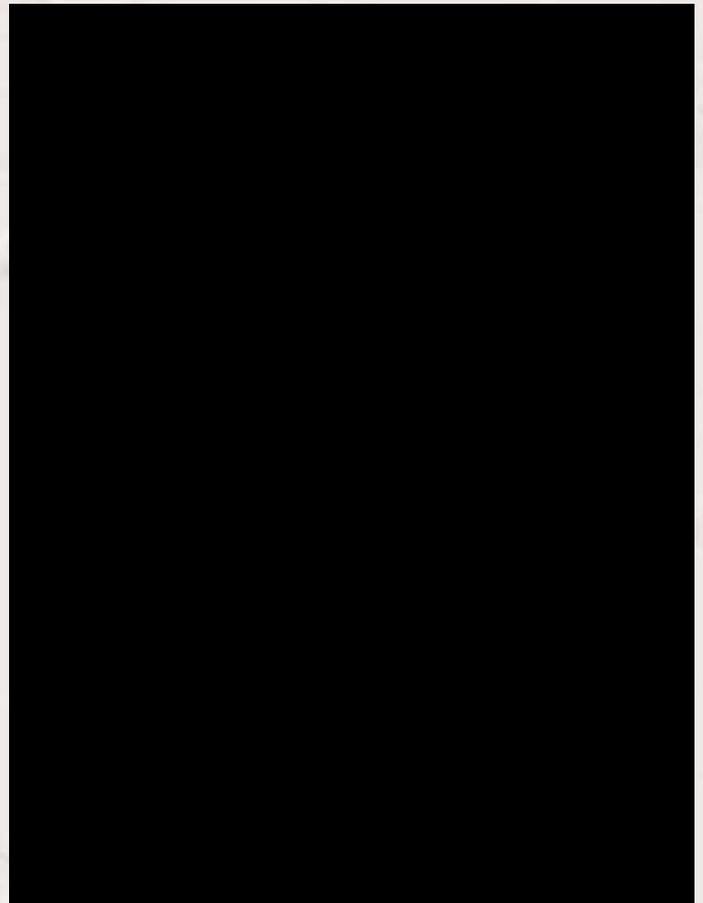
1枚の写真の発見から大きく研究が進展し、多大な復元根拠を提供することになったのです。



高松城天守古写真(公益財団法人松平公益会蔵)



現存天守との高さ比較



高松城天守古写真(ケンブリッジ大学図書館蔵)

※ホームページでは公開いたしません

天守の構造①

復元にあたり、構造（柱や梁桁、階段の配置や規模など）の把握は欠かせません。高松城天守の場合、この構造の把握が最大の課題です。構造把握の手掛かりとなる資料には、発掘調査で発見された柱跡と礎石、文献に記載された天守の寸法、古写真の3種があります。

発掘調査成果

天守台石垣の解体修理に伴う発掘調査では、地下1階に「田」の字状に配置された礎石と、4ヶ所の空閑地の中央で掘立柱を検出しました。また、礎石の一部には直線の線刻が残っており、土台を設置した位置を示すものと理解できます。礎石上に認められた土台の痕跡から、地下1階の東西の寸法が6間（1間＝6尺5寸で計算）であることが分かり、『小神野筆帖』に記載されている寸法と合致することが分かりました。



天守台地下1階掘立柱(茶色) + 礎石配置図(黄色)



天守台地下1階掘立柱(茶色) + 礎石(黄色) 平面図

ツガ材の掘立柱は、放射性炭素年代測定法により、1520～50年(27.6%)、1630～60年(40.6%)（※()内は較正後の確率）の伐採年代が想定されました。前者は生駒家の築城開始より30年以上も古く、天守建築部材の伐採年とするには相当に長期の保管を想定しなければなりません。一方、後者は松平家により正保4(1647)年に開始された天守の改築と合致することから、この掘立柱は松平頼重が改築した天守に伴うものであると考えられます。天守は大規模な改築がなされていないことから、古写真に写る天守の内部構造に、掘立柱が用いられていたと考えられます。



天守台地下1階の掘立柱(ツガ材)

天守の構造②

文献資料の調査成果

天守の大きさ

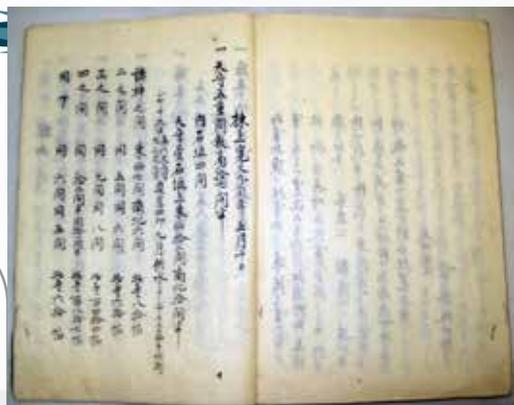
『小神野筆帖』は、高松藩士小神野與兵衛が著したものを寛政4(1792)年に齊藤次美が補筆した『小神野夜話』の異本として知られます。天守の規模についての記載があり、発掘調査の成果とも合致していることから、その記載内容はかなり信頼性が高いと考えられます。天守の大きさに関して抜粋すると

天守五重間数高十七間半内石垣四間 (≒天守は約 26.6m)

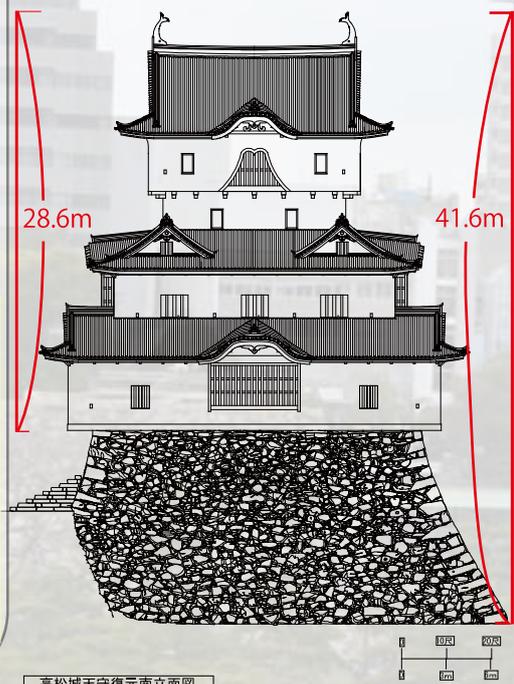
シャチホコ高六尺五寸 (≒1.97m)

とあります。また、各階の広さについても以下の記載があります。

諸神之間 (4階)	東西7間 南北6間 此畳80帖
二之間 (3階)	同5間 同6間 此畳60帖 (方位は誤記で逆か)
三之間 (2階)	同9間 同8間 此畳140帖
四之間 (1階)	同12間半 同11間半 此畳1(2?)87帖
同下 (=地下1階)	同6間 同5間 此畳60帖



『小神野筆帖』(瀬戸内海歴史民俗資料館蔵)



高松城天守復元南立面図

文献から復元した天守の大きさ

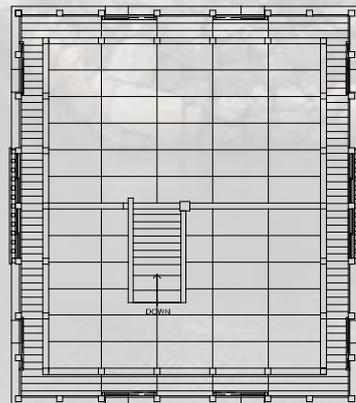
天守内部の様子

高松城天守には内部の様子が見える写真や図面がありませんので、文献から推測するしかありません。『小神野筆帖』には、最上階は諸神の間と呼ばれ、三千体の諸神を祀り、金の厨子や四神の旗を飾った特殊な空間であったことがうかがえます。

また、明治4(1871)年に行われた天守内部の一般公開の様子を記した『年々日記』には、内部に入ると暗いが、階段を上がると窓があり明るいことや、上階へ上った際の様子や、窓から望むことのできる風景等について記録が残っています。

古写真の調査成果

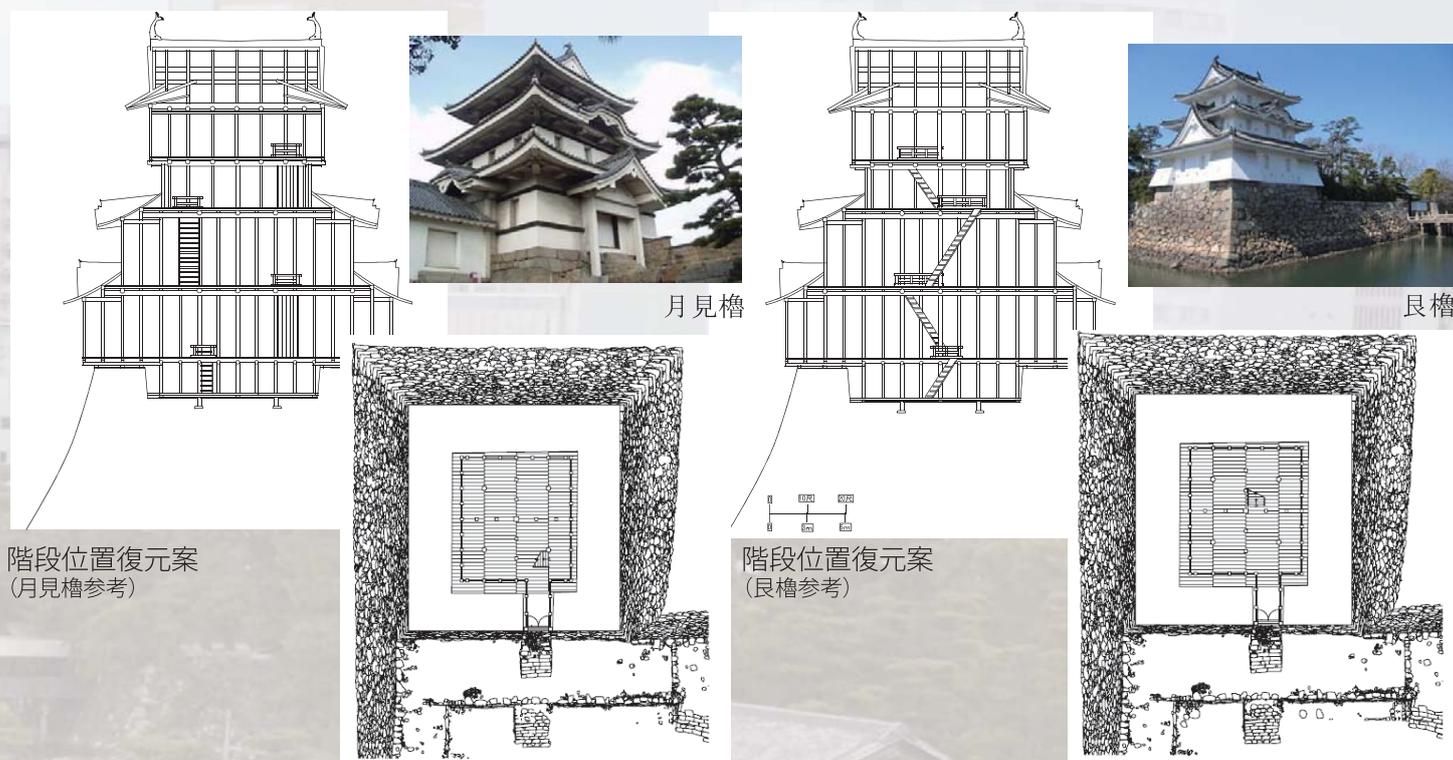
外観から内部構造を想定することも可能です。写真に写った、屋根を支える方杖と呼ばれる部材の位置と配置から、外周の柱の位置を復元することができます。発掘調査成果と合わせて、柱の配置はほぼ判明しました。



4階「諸神の間」復元平面図(月見櫓参考)

類例調査

様々な調査を積み重ねましたが、どうしても分からないのは階段の位置です。城内で現存する月見櫓は四本の柱（四天柱）が、長櫓は平面「田」の字の礎石がそれぞれ天守と共通します。こうした類例の階段位置を参考に、複数の復元案を作成しましたが、いずれも決め手を欠きます。この問題を解決するには、内部構造についての復元根拠の収集が必要です。



天守研究の現状と課題

各種調査によって、天守の外観についてはかなり正確な復元ができるようになりました。一方で階段位置や内部の意匠については復元根拠が十分ではありません。そのため、内部の構造に関する資料の収集が不可欠です。

特に重点的に搜索している資料は、①天守内部を写した写真、②建築時の木型（模型）、③天守内部の指図（図面）です。①については、明治4年に天守内部が一般公開されており、古写真には天守内部から撮影したと推測できるものもあるため、天守内部を撮影する機会があったはずです。②については、『小神野筆帖』等に、天守の模型が二の丸の藪の中に捨てられ朽ち果てつつあるといった記述があります。③については、松平家の倉庫及び高松藩の資料を引き継いだ香川県庁が高松空襲で焼失していますが、焼失前に写しが作成されるか、どこか別の場所に移されている可能性を期待しています。

このように高松市では、既存の資料の調査研究を進めるとともに、新資料の発見に努め、ありし日の天守の姿を明らかにする取組を続けています。

高松城天守復元の取組

VR高松城(アプリ)

これまでの調査成果を反映した、高松城全域のCGを作成し、VR(バーチャルリアリティ)アプリとして配信しています。特に天守は、AR機能を用いて、天守台の上に天守の映像を重ねて表示することができるなど、往時の高松城を視覚的に理解することができます。江戸時代の景観と現在を対比しながら、玉藻公園内を散策してはいかがでしょうか。



APPストア



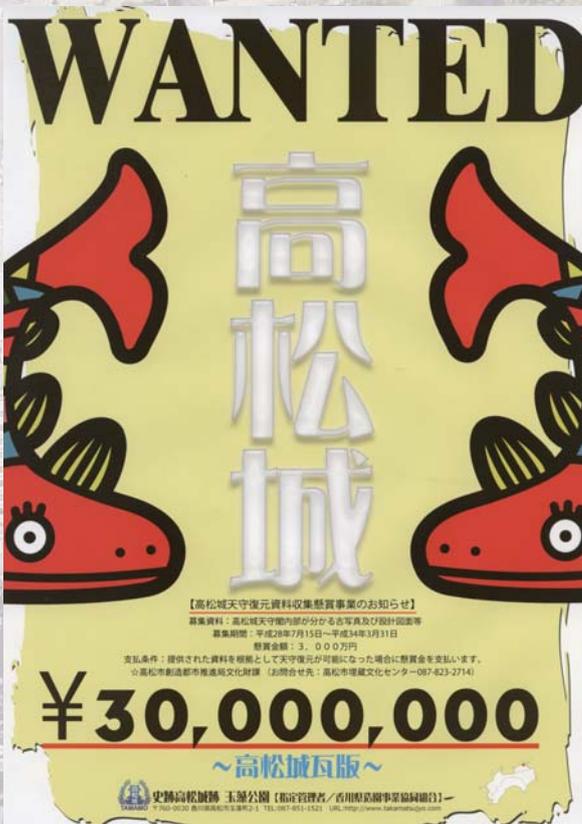
Google Play

スマートフォンアプリは玉藻公園内で使えます。



スマートフォンアプリは「APPストア」もしくは「Google Play」より無料ダウンロードしてください。

■iPhone OS: iOS8以降
 ■Android OS: Android 4.1以降 推奨
 ※「APPストア」は、米国およびその他の国々で登録されたApple, Inc.の商標です。
 ※「Android」「Google Play」は、Google Inc.の商標または登録です。
 ※一部端末では、本アプリケーションが正常に起動しなかったり、コンテンツの一部が正常に起動しないことがあります。
 ※本アプリケーションは無料ですが、ダウンロードにかかる通信費用はお客様負担となります。



天守復元資料収集の懸賞事業

高松城天守の復元に当たっては、特に内部の構造と意匠に関する情報が不足していることは、本書で紹介したとおりです。高松市では、天守復元に繋がる古写真及び設計図面などを懸賞金をかけて募集しています。これまで未発見の天守内部を写した写真や、建築時に作成された天守の模型、あるいは各階の図面などを探しています。お心当たりのある方は、高松市文化財課まで御連絡ください。

高松城天守

2018年7月

編集発行 高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課
 高松市番町一丁目8番15号
 tel 087-839-2660

<http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/kurashi/shinotorikumi/soshikihyo/bunkazai.html>